

「Blind Touch」

—初稿—

2025/7/5

雨森 れに

〈人物表〉

佐藤 ともこ

(14) 家庭内暴力を受けている中学生

村山 義人

(24) 弱視。体売って生活している

村山 義人

(28) 売春を斡旋している

安田 隆俊

(37) ともこの客

女

(18) 村山に斡旋を受けている

1. 10年前・ともこの家・室内（夜）

長屋式のアパート。電気はついていない。
窓際で怯えた様子の佐藤ともこ（14）。
大粒の涙を流しており、体中に痣や怪我がある。
窓にガラスの灰皿が当たり、破片が飛び散る。
ともこは顔を手で覆う。

2. 歌舞伎町・大久保公園横（夜）

ガラスの割れる音。

佐藤ともこ（24）がびっくりと反応する。

ともこはマスクとサングラスをかけ、顔が一切見えない。
音の方向では、浮浪者が割れた酒瓶に対して残念がっている。

ともこがサングラス越しに、浮浪者の様子を見る。

ともこは弱視であり、なんとか危険の有無を図ろうとしている。

買春目的の男がともこに近づく。

男 「顔見せてよ」

ともこ 「あっ」

男がサングラスを取り上げる。

ともこの眠たそうな目が露になる。

男 「うっわ。クソブスじゃん。無理だわ」

男はサングラスをその場に捨て、去る。

ともこはサングラスを探す。目の前にあるが、光が足りずわからない。

サングラスを拾う村山義人（28）。

村山 「このグラサン、でかい？」

ともこ 「あ、それ私の」

村山 「知ってる。身バレ防止的な？」

ともこ 「身バレっていうか、顔バレかな」

村山 「なに、有名人？」

ともこ 「お客取るのに、顔が邪魔でさ」

ともこがマスクをずらして、顔を見せる。

ともこ「わかるでしょ？」

村山、にやりと笑って、

村山 「客に困ってるんだ」

ともこ「うん。もうスマホも止まりそう」

村山 「じゃあ、俺んとこ来なよ」

村山がサングラスを、ともこの手に乗せる。

3.

村山の家・室内（夜）

高級マンションの一室。

ベッドにはともこと村山。裸で寝転がっている。

ともこ「顔、触らせて」

村山 「いいけど。なんで？」

ともこ「目が悪いから」

ともこが、村山の顔を触り始める。

指は瞼をなぞり、鼻筋へ。

ともこ「全然違う。自分以外って、どのぐらいぶりだろ」

村山 「違うほうが相性いいんだよ。遺伝子どーのこーので」

ともこの指が頬骨を確かめるように押す。

村山はともこの手を取る。

村山 「モコちゃんの顔もかわいいよ」

村山が、ともこの手を、ともこの顔へ誘導する。

ともこ「クソブスって言われたばっかだけど」

村山 「自信もって。ほっぺは丸いしき。鼻はアップノーズが流
行りじゃん？ 唇も小さくて小動物みたいだし」

村山はともこの指を頬、鼻、唇と触らせていく。

村山 「俺の中で美人はこういうかんじ。わかった？」

ともこ「微笑んで」嘘ばっか」

村山がともこの頭を撫でる。

ともこは心地よさそうに眠り始める。

4.

ビジネスホテル・廊下（夜）

翌日。古いビジネスホテル。ともこは壁に寄りかか
っている。マスクはしておらずサングラスだけして
いる。

村山は部屋の中の男、安田隆俊（37）と交渉している。

村山 「モコちゃん、おいで」

ともこは部屋の前に行き、お辞儀する。
安田は、ともこの手を取り部屋の中へ。

5. ビジネスホテル・部屋・室内（夜）

シャワーの音。ベッド周りに衣服が散らかっている。
ともこはバスローブ姿で衣服を探す。
男性物は丁寧に畳み、自分のものはすぐに身に着ける。

シャワーから出てきた安田、畳まれた服を見て驚く。

× × ×

ともこは安田から3万円貰う。

紙幣の認識マークを触る。

びっくりしたように顔をあげる。

何度もお辞儀し、部屋を出ていく。

6. 花園神社（夜）

村山、裏参道でスマホをいじっている。

ともこがそこに合流する。とても嬉しそうな顔をしている。

2万を村山に押し付けて、

ともこ 「すごい稼げた」

村山 「みんな偽善者だからね」

ともこ 「同情ってこと？」

村山 「その価値があるってこと」

村山はともこから貰った2万のうち1万を返す。

村山 「これは初仕事のお祝い。今日はいい部屋で寝れるね」
ともこ 「え？」

村山はともこの頭を撫で、去ろうとする。
ともこは焦って、

ともこ 「一緒に帰るんじゃないの？」

村山 「は？」

女 「あ、ヨッシーじゃん」

村山に抱き着く若い女。

ともこの顔を見て、顔を歪める。

女 「うわ、ブスい。趣味変わった？」

村山 「やめろって。これ、新しいスタッフ」

ともこがショックを受ける。

女 「（ともこを品定めするように見る）もうやった？」

村山 「そういうこと聞くなよ」

女 「ふーん。じゃあ今日は私。行こ」

女は村山を引っ張って歩き出す。

村山 「モコちゃん、また明日」

村山が手を振り、女の肩を抱く。

ともこは、呆然と立ち尽くす。

7. 歌舞伎町・靖国通り（夜）

ネオンが輝く中、ともこがフラフラと歩いている。

区役所通りの横断歩道で赤信号に気付かない。

車と接触しそうになる。

安田がともこの腕を引っ張る。

安田 「大丈夫？」

ともこ 「え、あ、ありがとうございます」

安田 「……モコちゃん、だったよね」

ともこはサングラス越しに男の顔を眺める。だが、

誰かわからない。

安田 「いいよ。こっちおいで」

8. 歌舞伎町・区役所前（夜）

噴水横の階段。黒人や酔っ払いがたむろっている。

安田は、ともこを階段に座らせる。

安田 「家は？」

ともこ 「どっかネカフェに……」

男は悲しそうな表情をする。

安田 「親御さんは？」

ともこが首を振る。

安田 「嫌じゃなかったら——うちに来る？」

ともこ 「仕事を斡旋してくれるんですか？」

安田 「そうじゃないけど……」

ともこがサングラスを取る。

ともこ 「同情ですか」

安田は何も言えなくなる。

ともこ 「顔、触らせてください」

安田は戸惑いながら、ともこの手を自分の顔へ導く。

ともこの指が安田の瞼をなぞる。

ともこ 「私と同じぐらい重たくて」

次に鼻、頬と触る。

ともこ 「なだらかで、しっとりしてる」

安田は困ったように微笑む。

ともこの指が安田の唇を触る。

ともこ 「笑ってくれてるの？」

黒人が飲んでいたビールの瓶を落とす。

ガラスの割れる音。

安田、とっさにともこを庇う。

安田 「なんだ。ビール瓶かよ」

ともこは戸惑いの表情を浮かべる。

だが、徐々に泣き顔へ変わっていく。

ともこは安田にすがりつく。

安田は躊躇しながら、ともこの背中を撫でる。

ビルの隙間から覗く空は、白み始めている。

おわり